

巻 頭 言

官公庁の御用納めは毎年12月28日（この日が土曜・日曜であれば前倒し）と相場が決まっているようですが、昨年末は、その間際（令和3年12月27日付け）で、文部科学省初等中等教育局長から、各都道府県教育委員会教育長、知事、附属学校を置く各国公立大学長等関係各位宛てに、「GIGAスクール構想における高等学校の学習者用コンピュータ端末の整備の促進について（通知）」と題する檄が飛びました。

令和3年12月24日に閣議決定された「デジタル社会の実現に向けた重点計画」を踏まえ、高等学校段階においても（令和4年度入学生からの新指導要領実施も睨み）1人1台の学習者用コンピュータ端末環境を早急に整備する必要があることを説く内容の文書がそれです。

ICT（Information and Communication Technology）を基盤とした先進技術を活用して「児童・生徒の力を最大限に引き出す学び」の実現を目指すGIGAスクール構想は、2019年12月に文部科学省が打ち出した5年計画のプロジェクトですが、コロナ禍における教育のICT化の必要性が痛感されるなかで、（新型コロナウイルス感染症対応地方創生臨時交付金の活用も含め）コロナ禍を言わば強い“追い風”にして同構想を“前倒し”で推し進める動きが顕著であることが見て取れます。

このような小・中・高の学校現場でのICT環境整備の動きに対して、ICTを十二分に使い熟し、さらに教育者としての自らの力を最大限に発揮しうる教員を養成し、社会に送り出すことが教職課程を設置する大学の責務（しかも急務）であることは言を俟ちません。

甲南大学教職教育センターでは、甲南大学が様々な領域で多種多様に推進・展開しているKONANプレミア・プロジェクトのサブプロジェクトのひとつ「つながりと成長の教職志望者支援プロジェクト」を部局ビジョンとして掲げ、つながりに注目したICT活用教育実践について研究を重ね、それを教員養成に活かすことを通して、コロナ禍のような社会の激変にも適切に対応し生き抜く力をもった学び続ける教員を養成することを目標に活動を続けています。

「（人と人の）つながり」と「（教職にあるものが）学び続けること」の重要性に注目し、卒業生教員と現役の教職志望学生および教職教育センターの連携を深めるため、2020年度は（コロナ禍の故に）やむなく実施を見送った「卒業生教職員の集い（継星ラウンジ）」を、2021年度は感染症に対する万全の注意を払いつつ対面で実施いたしました。極めて有意義な人的交流が実現したと思います。厳しい制約下での実施に尽力された関係各位にこの場を借りて改めて御礼申し上げます。本当に有り難う御座いました。

教職教育課程の様々な活動については、2021年度も昨年度と同様にコロナ禍のもとで種々の制約を受けながらも、同課程で学ぶ学生諸君も同課程を営む教職員も昨年度の経験知の蓄積が有効に機能していると覚しき場面が小職の目からも随所に窺えました。

コロナ禍は年が改まってもデルタ株にオミクロン株の跳梁が重なり未だ収束の兆しを見せぬなか、教育分野は云うに及ばず現代社会のあらゆる面でICT（情報通信技術）の果たす役割と期待は増強しに高まるばかりですが、ときにはInformationやCommunicationの原義にも思いを馳せ、「人物教育」を標榜する本学に相応しくまた時代の要請にも適う教職教育の在り方を改めて問い直しつつ、同課程に託された課題の一つ一つに真摯に向き合っていきたいと思います。

なお、末筆となりますが2021年10月末日をもって甲南大学を依願退職され、今は故人となられた伊藤朋子氏への思いを、誠に僭越ながら教職教育センタースタッフ一同を代表しここに書き記したいと思います。同氏は文学部・教職教育センター特任教授として余人を以て代え難い深い学識と情熱をもって教職教育に尽力されました。ご退職を決意された頃の前後はご体調が優れぬ様子ながらも、「体調回復を最優先し、復調が叶えば教員生活に復帰したい」と力強く語っておられた同氏でしたが、新年も明け初めて間もなく同氏のご逝去が報じられ、センタースタッフ一同は突然の悲報に唯々呆然となり、尋いで深い悲しみのなかで言葉を失いました。同氏は教職教育センターにおける種々の業務の役割分担においても確りと役目を果たされましたが、志半ばで甲南大学を去られ、逝かれた同氏の最後のセンター業務が奇しくもこの年報の編集作業でした。残されたものが年報の編集作業を引き継ぎましたが、伊藤先生、この度の年報の仕上がり具合は如何でしょうか、気に入っていただけましたでしょうか。

謹んで伊藤朋子氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

教職教育センター所長 松本茂樹